



## 「為替」の誤解

通貨から世界の真相が見える

上野泰也 著 朝日新聞出版 1575円/246ページ

### profile

うえの・やすなり

みずほ証券チーフマーケットエコノミスト。1963年生まれ、上智大学文学部卒業。同大学法学部法律学科に学士入学後、国家公務員試験に合格し、会計検査院入庁。富士銀行に転じ、為替ディーラー、マーケットエコノミストを歴任。2000年より現職。

02

極論や暴論を排してあるべき政策を説く

著者 東洋英和女学院大学教授 中岡望

円相場がどうなるかは大きな関心事である。関係者の間では「ドル1150円の超円高もありえる」とささやかれる。また巨額の財政赤字と高齢化に伴う低成長が予想され、中長期的に「ドル1200円の円安もありうる」と主張する論者もいる。本書は、そうした疑問に丁寧に答えている。著者は、みずほ証券のチーフエコノミストで、各種のエコノミスト・ランキングでトップグループに選ばれる人物である。人気の秘密は分析の切り口の軽やかさにあるのだろう。本書では、著者は相場をどう分析

しているのか。「ドル1200円の円安待望論」に対しては、中長期的には、その蓋然性は高いが、そうした事態が起こる時は、円（あるいは日銀）への信頼が決定的に損なわれた時だと指摘する。円安になったとしても、その時の日本経済は円安待望論者が期待する姿とは似て異なるものであるという。

では、超円高論はどうか。日米の購買力で見れば、超円高はないとは言えないが、相場が超円高を言い始めた時は、相場の反転が近い時だと、市場での経験則を語る。では何が円高の要因なのか。著者は、ドルやユーロのリスクの増大が原因で、大量の資金が相対的にリスクの低い円に流れ込んだと分析する。その分析に特に目新しさはないが、説得力はある。

ただ、本書の面白味は「円高そのほかの経済情勢にまつわる表層的な議論の間違いを指摘しつつ、日本にとって真に必要な経済政策」を分析し、「極論や暴論」を排して、あるべき政策を説いている点にある。奇をてらうことなくバランスの良い分析を展開している。

最近、証券エコノミストの活躍が目立つが、アカデミックな立場からすれば、もう少し骨太な経済論からの分析もほしい。

03



## 復興は現場から動き出す

上 昌広 著

東洋経済新報社 1890円

東大医科学研の教授である著者は震災直後から福島県浜通り地区に入り救援活動を行ってきた。本書はその詳細な記録であり、新聞・テレビが伝えなかった現場の生々しい状況と人々の息遣いが伝わってくる。病院の機能が止まったいわき市からの透析患者搬送、相馬・南相馬両市での多数の患者への対応、飯舘村での健康診断、複数地区での被災者への対応、復興活動。医療関係ボランティアたちが悪戦苦闘し成果を収めていく様がビビッドに描かれる。彼らは著者が作り上げたメーリングリストとその人脈によってつながった「個」であり、震災時にこうしたネットワークがいかにかに効果的か、中央や県の行政がいかに当てにならないか、筆法はまことに鋭い。現場を見ようとしないメディア追及も容赦なく、個人の称賛も批判もみな固有名詞で率直に述べられる。東北の医学教育の貧弱さへの言及も胸に迫るものがある。(純)

04



## 四〇〇万企業が哭いている

石塚健司 著

講談社 1575円

明らかに「見立て違い」から始まった捜査ながら、筋書きと現実との乖離に直面しても特捜部は撤退せず、事実をねじ曲げて強引に突き進んでいった。頼みの録音・録画制度も踏みこじられ、「粉飾する中小企業など何万社潰れても関係ない」と担当検事は豪語していた。この「至んだ正義」の実態は検察首脳をも絶句させるものだった。

長引く不況下で懸命に経営に取り組む中小企業経営者たち。その多くは、生き残るため売り上げの水増しなど何らかの粉飾決算に手を染め、また、彼らを支える税理士や経営コンサルタントなどの多くもこれに協力せざるをえない状況になっている。

本書は、そうした中小企業の一社に焦点を当てて、東京地検特捜部の捜査によって無残に踏み潰されていく過程を生々しく描いている。綿密な取材によって特捜検察の恐るべき実態を暴きつつ、同時に会社を守るため苦闘した男たちの人間賛歌にもなっている。